様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　３ 日現在

機関番号：３３４０３
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2016～2019
課題番号：１５ＫＫ０１３７

研究課題名（和文）異文化トレーニング学習支援システム開発のための理論的・実践的研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Developing Effective Teaching and Learning Methods using an E-Learning Programme for Intercultural Training in a Blended Learning Environment in Japan(Fostering Joint International Research)

研究代表者
加藤　優子（Kato, Yuko）

仁愛大学・人間学部・教授

研究者番号：９０５７０６１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,400,000円
渡航期間：　6.5ヶ月

研究成果の概要（和文）：本国際共同研究の目的は、高等教育における学生の異文化コミュニケーション活動に必要な知識をより効果的に育成するために、基課題で開発中の異文化トレーニング学習支援システムと、英国の批判的思考教育を交えたブレンディッド教育方法を探究し、授業モデルを確立することである。英国の研究機関では、国際共同研究者と本研究の内容の精査を進めると共に、その他の英国の研究者らの協力を得て、本課題に関する面接調査を実施した。帰国後は、本務校にて授業モデル案の実践的研究を行った。現在、本実践的研究によって示された修正点を明確にしつつ、本研究の最終成果物を作成中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究を通し、語学教育や留学制度とは異なる切り口で、異文化間コミュニケーション活動に必要とされる異文化間能力を育み、多文化化する日本社会で必要な実践的知識を備えたグローバル人材の育成に寄与できる、異文化トレーニングの特長を最大限に生かす教育方法の発展が期待できる。本研究は、異文化コミュニケーション学の異文化トレーニング研究の流れを引き継ぎつつ、ICTを用いた異文化トレーニングと批判的思考教育のブレンディッドというアプローチからの実践に焦点化し、高等教育での異文化トレーニング研究の理論的・実践的進展に貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：The aim of this international research project is to investigate effective teaching and learning methods in a blended learning environment using an original e-learning programme for intercultural training. This would promote the development of profound knowledge about cultural issues, critical thinking and intercultural communication skills among students. While staying in England, the researcher asked for some academic advice from a co-researcher for this research project. In addition, the researcher successfully conducted interviews with academics and students on intercultural issues in England. After returning to Japan and implementing an experimental e-learning programme for intercultural training, the researcher has been summarising some advantages and disadvantages of teaching and learning methods in a blended learning environment.

研究分野：異文化コミュニケーション、異文化間教育学

キーワード：異文化トレーニング　批判的思考教育　ICT　ブレンディッド教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

異文化トレーニングは、異文化環境下での目的達成・良好な人間関係・意味のある生活を可能にする、異文化間能力の育成を目的とする教育方法の 1 つである。研究代表者は、工学分野の研究者と共同で、異文化トレーニング学習支援システムを実装し（Kato, 2001）、その高等教育における実践では、専門科目「異文化理解」の授業支援としての教育的有効性が実証された（加藤、2013）。しかし、本システムの内容は、異文化トレーニングの目的の１つである、実社会で異文化理解に関する課題解決を目指して異文化コミュニケーション活動を行う実践的知識の育成には至っていない。研究者らへの面接調査では、本システムの異文化トレーニングを導入と位置づけ、実践的知識を育む学習を実現する、理論的に整備された教育方法を検討する必要性が示された（Kato et al., 2014）。そこで研究代表者は、知識を日常生活で適切に活用し行動する力を養成する批判的思考教育の方法に着目した。社会における問題の所在を明確にし、論理的に考え、問題解決を目指す批判的思考を育む方法は、実践的知識に基づくコミュニケーション能力育成の基盤とされ、英国のシティズンシップ教育（Davies, 2005）、日本の高等教育の人材育成論にて重要な教育方法と位置づけられている（楠見、2014）。その方法を、本システムと同時に行う授業の基盤として組み込むことで、異文化トレーニング学習支援システムの学びを通し基礎的知識を得た学生が、実社会で起こり得る異文化理解に関する諸問題を論理的に分析し、適切な異文化コミュニケーション活動によって解決を図ろうとする実践的知識の習得へと導くことができるのではないかと考えた。

ところで、日本社会の異文化間摩擦問題や教育的課題等の異文化理解に関する諸問題の研究は着実に進められているが、古くから移民・難民を受け入れてきた英国では、異文化理解に関する多様な問題提起に加え、それに対応する多様な教育の理論的・実践的研究が多数報告されている（佐久間、2007）。日英の社会的・教育的背景は様々な点で異なるが、日本より早くから多文化共生社会を形成した英国の教育学者から異文化理解に関する諸問題と教育に関する知見を得ることで、日本社会における同様の課題をより客観的・多角的に捉え、本システムの異文化トレーニングと批判的思考教育に関する考察を深め、内容の発展につなげることができると考えた。

２．研究の目的

本国際共同研究では、英国社会における異文化理解に関する問題の学習を視野に入れつつ、英国で教育学を専門とし、批判的思考教育と本研究を熟知している国際共同研究者と共同で、異文化トレーニング学習支援システムと批判的思考教育によるブレンディッド教育方法を考案し、実践的知識を育む授業モデルを提案することを目指す。これにより、語学教育や留学制度とは異なる切り口で学生の異文化間能力を育み、多文化化する日本社会で必要な実践的知識を備えたグローバル人材の育成に寄与できる、異文化トレーニングの特長を最大限に生かす教育方法の発展に貢献する。本研究は、異文化コミュニケーション学の異文化トレーニング研究の流れを引き継ぎつつ、ICT を用いた異文化トレーニングと批判的思考教育のブレンディッドというアプローチからの実践に焦点化し、高等教育での異文化トレーニング研究の理論的・実践的進展に貢献するものである。

３．研究の方法

どのような批判的思考教育を、どのように本システムと授業のブレンディッド教育による学習内容に取り入れれば、学生の異文化コミュニケーション活動に関するより実践的な知識の習得に繋がるのかについて探究する。そこで、次の手順を踏んで研究を進めた。①．どのような批判的思考教育が、特に日本の学生の学習内容として効果的であるか、関連する事例の文献調査を行い、教育方法案を検討する。②．①にて提案した案について、国際共同研究者とともに内容を精査する。③．②にて精査された案を授業案として組み立て、その授業案の実践的研究を帰国後に実施する。④．③によって見えてきた問題点を明らかにし、改善点について国際共同研究者とともにメールやネット会議にて取り組む。④論文等による成果報告を行う。

４．研究成果

（１）英国の研究機関では、国際共同研究者と定期的に面談し、本研究の内容の精査を進めることができ、授業案の提案をすることが可能となった。国際共同研究者と考案した教育方法とは、英国の大学の授業においてよく用いられている批判的思考教育の方法に則るものである。具体的には、一方的に講義をするだけではなく、多くの質問を与え、その質疑応答をもとに授業を進めていくという方法であり、学生の考える力を育成するためには、より効果的な質問内容が重要になる、というものである。英国の学生のように、発言することで議論を深める授業形式には慣れていない日本の学生の特徴を伝えつつ、異文化理解に関する、特に実践的な知識を促進できるような質問内容および教育方法について、多くの提案を受け検討したものをまとめ、帰国後、高等教育における科目「異文化理解 a」授業において実践した。ただし、帰国直後に行われた本授業は、本務校における授業時間割設定の都合により、夏期集中講義という変則的な形式で行われたことと、時間割の都合上、考案してきた教育内容・方法のより客観的な効果測定は行っていな

いことから、一概にその結果を示すことは困難である。しかしながら、一日 4 時限の 4 日間集中講義という長時間内においても、学生は飽きることなく授業中の質問について考察して意見を交わし、積極的な態度を示す場面が多く見受けられたことから、ある一定の効果はあったものと考えられる。また、夏期集中講義の間には、効果が認められたと考えられる質問内容や、再検討を要する質問内容についての確認を取り、その後英国の国際共同研究者と改善点の検討を行った。現在は、本授業案をより良いものにすべく、改めて内容を整理しているところである。

（２）日本より早くから多文化共生社会を形成した英国の異文化理解に関する諸問題と教育に関する知見を、主に文献調査や国際共同研究者への面談によって得るなかで、英国に在住している海外出身者が、英国における多文化共生社会の利点、あるいはその逆の問題点をどうとらえているのかを探究することにより、今後、海外出身者をこれまで以上に受け入れ、多文化共生社会を目指そうとしている日本および日本の教育界が注意すべき点を浮き彫りにする切り口になるのではないかと考え、英国滞在中の期間を利用し、英国在住の海外出身の研究者や学生を対象にした面接調査をできないかと考えた。そこで、国際共同研究者、および研修先機関の協力を得て、研修先機関に在籍する教育学系の研究者ら、および学生を対象とした面接調査を実施した。現在は、本調査によって収集された資料の分析を進め、本研究の授業モデル案へ生かすことを検討しているところである。

（３）その他の研究成果として、研修先の研究機関の研究者による招待を受け、本課題に関わる教育学関連の研究発表会に参加した。また、本課題に関連する研究内容の発表として、2 つの国際学会にて発表および論文を 2 本作成し、うち 1 本は査読付きの国際学会誌に掲載された。現在は、帰国後の実践的研究によって示された改善点を明確にしつつ、本研究の最終成果物を作成中である。

＜引用文献＞

①Yuko Kato, Teaching and Learning of the Intercultural Training Program using Information and Communication Technology in Higher Education in Japan, *The Asian Conference on Education Official Conference Proceedings 2011*, 2011, 897-904.

②加藤優子、「ICT を用いた異文化トレーニング教育支援システムの研究：高等教育における実践について」、『異文化コミュニケーション』16、2013、27-43.

③Yuko Kato, Izumi Suwa, YoshitomoItakura, Toshiyuki Hamada, Jousuke Kuroiwa, Tomohiro Odaka, Intercultural Training in a Blended Learning Environment in Japanese Higher Education, *The 9th International Conference on Computer Science & Education*, 2014, 390-393.

④Ian Davies, *100 Ideas for Teaching Citizenship (Continuum One Hundreds)*, 2005, Continuum.

⑤楠見孝、「「批判的思考力」と大学教育」、『ＩＤＥ-現代の高等教育』、2014、560: 23-27.

⑥佐久間孝正、『移民大国イギリスの実験―学校と地域にみる多文化の現実』2007、勁草書房.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 今井佑輔、黒岩丈介、小高知宏、諏訪いずみ、白井治彦、加藤優子	４．巻 67
２．論文標題 「異文化教育支援のためのスマートフォンゲームの実装」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『福井大学大学院工学研究科研究報告』	６．最初と最後の頁 23，30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuko Kato	４．巻 －
２．論文標題 A Report on Students’ Views about Japanese Secondary Education for the Global Age in 1999 and 2019: The Basic Research for Developing Learning Content for the Original E-Learning Programme of Intercultural Training	５．発行年 2019年
３．雑誌名 The European Conference on Education 2019: Official Conference Proceedings	６．最初と最後の頁 11，23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuko Kato	４．巻 6(1)
２．論文標題 A Report on International Students’ Views on Japanese Culture: The Preliminary Research on the Development of Learning Content and Effective Teaching Methods for Intercultural Training	５．発行年 2020年
３．雑誌名 International Journal of Interdisciplinary Social Science Studies	６．最初と最後の頁 31，38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Matthew Davies, Yuko Kato	４．巻 5
２．論文標題 Global Citizenship: Building Bridges Between Japan and the UK Through Teaching Controversial History	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Teaching Citizenship	６．最初と最後の頁 54，55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Yuko Kato
2．発表標題 A Report on Students’ Views about Japanese Secondary Education for the Global Age in 1999 and 2019: The Basic Research for Developing Learning Content for the Original E-Learning Programme of Intercultural Training
3．学会等名 The 7th European Conference Education（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Yuko Kato
2．発表標題 A Report on International Students’ Views on Japanese Culture: The Preliminary Research on the Development of Learning Content and Effective Teaching Methods for Intercultural Training
3．学会等名 The 9th Academic International Conference on Multidisciplinary Studies and Education（国際学会）
4．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	キリアーコウ　クリス (Kyriacou Chris)	ヨーク大学大学院教育学研究科・Department of Educational Studies・Professor	